

「原子カムラ」の境界を越えるためのコミュニケーション・フィールドの試行

第6回フォーラム研究会

逐語録

(木村) では、始めたいと思います。

まず資料確認です。議事次第が F6-0 です。前回の議事録が F6-1。第3回フォーラム反省会メモが F6-2。第3回フォーラムに関するアンケート集計結果が F6-3 です。第4回フォーラムスケジュール表（運営者版）が F6-4 です。

次からがフォーラムのときに配布する資料です。第4回フォーラムの頭紙が F6-5 です。前回の模造紙のまとめが F6-6 です。ブレインストーミングの進め方が F6-7。グループワークの進め方が F6-8 です。第5回フォーラムのテーマ案が F6-9。これは皆さんにメールで募集したものを取りまとめたものです。第5回フォーラム開催のお知らせが F6-10 です。次に、第4回フォーラムに関するアンケートが入っています。F6-11 です。最後に、模造紙の作り方が F6-12 です。以上12種類の資料になります。いかがでしょうか。

それでは、議事にしたがって進めていきたいと思います。

0. 前回議事録確認

(木村) まず、議事録確認ですけれども、すでに皆様にメールで送っていますので、ご確認いただければと思います。前回は、第2回フォーラムの振り返りをして、第3回の設計を詰めたということになります。そして、その後第3回フォーラムを実施したということになります。

1. 第3回フォーラムの振り返り

(木村) 次に、第3回フォーラムの振り返りですが、また少し時間を取って、F6-2とF6-3とF6-6を見てもらって、一言ずついただきたいと思います。10分ほど時間を取ります。よろしくお願いします。

(各自資料に目を通す)

(木村) だいたい時間になりました。今週はこちらから行こうと思います。

—— アンケートの集計結果ですけれども、市民側の感想が、専門家の人たちの努力を感じられたとか、悩んでいることを知って親近感を持たせたとか、専門家が事故でショックを受けていると聞いてびっくりしたとか、感情の部分で親しみを感じているというのがありありと出ているなと思いました。それがいい評価につながってしまっているのかなど。私の気持ちとしては、「つながってしまっている」という感じですが、甘くなっているというか。そういう特徴があるなと思いました。

あと、Q8に、サブファシリテーターのおかげで議論に集中できたとあるので、その点はちょっとほっといたしました。

(木村) 第3回はサブファシリテーターにファシリテーターをお願いしましたが、誘導だったとか、そういう意見は特にありませんでした。あるとすれば、話し合いに集中できましたという話だけだったので、そういう意味では今回はその信頼がうまく構築できているのかなと思います。

—— あと、「一部の方の長い演説は、ファシリテーター等が止めることを徹底したほうが良いのでは」とあるので、もしまたファシリテーターをするのであれば、もう一段階頑張らないといけませんね。

—— (話の長い方は) 各班に1人くらいずついらっしゃいますよね。

(木村) では、次の方、どうぞ。

—— 市民の方が結構前向きに評価してくれているのに対して、専門家の方は専門家同士の評価が分かれている。「同じ専門家というレベルにあるのか疑問がある」とか。一方で、市民の方の中にも、「専門家同士の意見交換の場があってもいいのではないか」というような、客観的に見られている方もおられると。

実際に私もそういうところがすごく感じられました。メンバーの組み合わせによっては、ちょっと難しいところがあるなと思いました。

あと、反省会でもありましたが、市民の方の漠然とした質問に対して、もう少し絞り込みというか、もう少し明確化しなければ、専門家の方も第一声が話しづらい。市民の方からある程度絞ってくれた質問が出たときに、それなりに話が進んでいったということですので、やはり明確化がひとつのキーワードかなと思いました。

(木村) こういう話を、専門家がどう持ち帰っているのかが気になるところです。実際には、意見は一致しないです。「専門家」というのは一体何なのかということを考えるいい機会になるといいなとは思うのですけどね。

では、次の方、どうぞ。

—— 同じところですが、それでも、「専門家の中で意見が一致しない」ことについて。聞いている私たちとしては、それが「きちっとした変わらない情報」なのか、「ご意見」なのか、区別がとてもしづらいのです。両方にまたがってお話しされることが多いので。

「意見が一致しない」のは当たり前だと思います。市民も一致しないと思うので。でも、その中で、「はっきりした情報」が一致しないというのは、こちらにとっては困ることだから、「情報」は「情報」としてきちっと提供することと、それが「情報」だと分かるように話していただきたいなど。そこにもう一歩気がついてくださるといいなと思いました。

それから、Q3に「市民に納得してもらおうのは、『何を説明するか』よりも、『誰が説明するか』が大事な要素になると感じ、少し悲しい」と書いてあるのですけれども、私たちは専門家と親しくないものですから、公共でそういう説明をしてくれる「あの人がいい」と言うのですけれども、「あの人」みたいに話してくれれば、たぶん誰でもいいと思うのです。それを真似してくださるとか。「その人がいい」と言っているのではなくて、「そういう話し方がいい」ということを、もう一歩分かってくださるといいなと。このままだと、「ああ、私じゃ駄目で、『誰か』なんだな」で終わってしまうかもしれないと思うので。だから、皆さんがどこかで訓練する場があるといいのかなと思いました。

反省としては、前回ファシリテーターをやったときに、あまり口を挟んで公平でないようにするのはいけないと思っていたので、なるべく順番にあてるとのことだけに注意をしていたので、内容についてちょっと落ちていたなということと。

それから、前は（元気ネットの）人数が多かったんで、1人がサブファシリテーターにならず、フラットな立場で見えていたので、フォーラムのやり方、それぞれの立場の人がどのように動いたらいいのか、が見えたのではないかなと思うのですね。だから、それをもう少し次のフォーラムのやり方、方法論に活かせるといいかなと思っています。今まではそういう立場の人がいなかったものですから、反省会でその方の話を聞いて、とても新鮮でした。

（木村） はい。その辺は最後に話していただこうと思います。では、次の方、どうぞ。

—— Q1に、市民の方で、「何が分からないか、何が必要なか、分かっている気がします」というご意見があるのですけれども、市民の宿題プリントが、行き当たりばったりで書いているものではないので、ご本人にとっては整理されているのかもしれないですが、サブファシリテーターのほうがそれを理解できなかったというか。たぶんご本人も、本当に自分の中で整理されて、ポイントを絞りきれたわけではなくて、まだまだ漠然としている部分があったのではないかなと。そこをきちんと、市民から挙がってきた質問をもっと明確化して、絞り込む必要があったなと思いました。反省会メモにも書いてあるので

すけれども、市民の疑問と専門家の説明がかみ合うようにするために。

それから、Q3の専門家のところに、「専門家といっても分野、考え方の差は大きい」という意見がありますが、これは専門家の方の実感ではないかと思うのです。次回のテーマを出すときに、確かA班だったと思いますが、専門家同士のコミュニケーション、話し合いが必要ではないか、というテーマ案が出てきたと思うのです。そういう時間、機会が取れたらいいのかなと思いました。

(木村) 反省会メモの、市民の「漠然とした質問」を明確化するプロセスが求められる、というところですが、総括はこうでしたっけ？ かみ合わない場面もあったようですが、それをシステムに取り入れる努力が必要なほどではないようだ、とありますが、逆のことを言ったと思います。そのときにファシリテーターが個別に対応するというよりは、システムとして対応できるように考えておくことが必要ですねと言ったと思うので。修正しておいてください。ただ、第4回にそれを入れたかという、今回は入っていないのですけれども。

あと、専門家同士のコミュニケーションについては、分野が違うと言われながらも、「専門家」と見られてしまう以上、うまく対応してほしいなと思うところもあるのですけども。ただ、難しい問題であることも確かです。

—— 先ほどもご意見がありましたが、市民の専門家に対する壁は少しずつ低くなっているかなと。心情的に。知識レベルは別の話ですけれども。親しくなることによって、ポンと越えられる部分もあるのかなと。

一方で、専門家同士はどうなのだろうって。グループの中での話し合いを聞いていると、そういうことを感じる瞬間もあるものですから。

(前参加者) 市民は、おそらく、「原子力の専門家」という見方をしていると思います。私たちがそうでしたし。でも、専門家の方たちからは、「これは私の専門ではない」という意見が出てきていたと思います。そこは、木村先生が言われたように、市民としては「専門家」という形で見るので、それを分かっていたいただきたいなという思いがあります。

(木村) では、次の方、どうぞ。

—— 私は、このアンケートの結果を見て、半分くらいの方はたどり着くべきところにたどり着いているような気がしました。

だけど、今話題になった、「専門家同士で話が必要だ」という意見を出している方は、まだ分かっていないのかなと。

一方で、非常にいい意見も出ています。例えば、Q3の「何度もQ&Aを繰り返せば、か

なりの壁は小さくすることができるのではないか」。これは専門家の方の意見だけれども、この方は相当分かっているなど。質問するというのもやはり難しい。自分が本当は何を知りたいのか。市民の方は、別にものを設計するわけでもなんでもないから、専門的なことを知りたいわけではないけれども、だけど、やはり知りたいわけですよ。聞いている人は、別にものを設計するために聞いているわけではなくて、安心を得るために聞いている。それに対して、質問の上辺だけで答えてはやはり駄目なのですね。この人は、だから、その辺がよく分かっているなど。Q&Aを掘り下げていくと、結局何を知りたいのかということが、お互いに分かってくる。

専門家同士でも、市民の間でも、それは全く同じです。実は終着駅は同じなのだけれども。だから、専門家といっても市民の一員だという分析をされた方がいましたよね。あの方は最初から非常によく物事の真理が分かって、議論を始められている方だと思いましたがけれども。そういう意味で、3回を通じて議論が深まってきて、コミュニケーションの本質が分かっている人が多いので、非常によかったなという気がしました。以上です。

(木村) はい。先ほどの話の続きという感じですね。では、次の方。

—— 2点あります。

1点目は、今おっしゃったことに半分同意で半分反論があるという感じです。このアンケートを見たときに、市民の方が変わっている、いろいろなことに気づいた、学んだということは読み取れるのですが、専門家の方からそういうことが読み取れるかということ、たぶん1人か2人で。例えば、Q3の新しく気づいたことがありますかに対して、専門家8人のうち4人しか書いていないとか。そういうところも含めて、専門家が入ってきてくれないとか、コメントも他人事っぽい感じがします。もうちょっと自分がどうすればいいのかとか、そういうことを考えてほしい。ほしいと思っても仕方がないので、そのためにどうするかということを考えないといけないな、というのが1点目です。

2点目は、模造紙のまとめについてですが、私自身は発表を聞いていて、市民からはもう少し厳しいコメントが返ってきていると思っていたのです。「全然分からない」とか、そういうコメントがもっと入っているのかと思ったら、案外そうでもなくて。これが、今回集まった人たちが優しいだけだったらいいのですけれども、本音で話せないようなところがあるのだったら、そこは変えないといけないのかなど。

(木村) 「専門家から市民へ」のところの話ですか？

—— はい。

(木村) いや、私は割と厳しいと思うのですが。

—— そうですか？ 専門家からは割と厳しいコメントが入っているのですが、市民から厳しいコメントはあまり多くなくないですか？

(木村) 私は、分かりにくくても頑張って話している人のことは結構擁護していて、一方で、明らかに駄目だろうという人に対しては厳しいコメントが来ているように思っているのですが。

私になるほどと思ったのは、「考えてほしい、考えてみてください……市民は全然考えていないみたい」というコメントです。これは刺さる言葉だなと。

—— そうですね。そういうところへのリプライがアンケートに返ってきてほしいというところはあるのですけれども。

(木村) もう一步必要なのかなあ。

—— いや、分かりません。こんなものと言われればそうなのかもしれないけれども。

(木村) まあ、本当はこういうこともちゃんと分析しないといけないと思いますが。

あと、専門家が他人事だという話がありましたね。それは、去年もそうだったと思います。全体としてそういう傾向がある。去年は、少なくとも最後のアンケートだけを見ると、他人事感の漂うアンケートだったから。

—— 専門家は、このフォーラムへの参加動機で、勉強しようという意識が低いのではないのでしょうか。「教えてやろう」という傾向が強くて、「勉強しよう」という思いが元々ないから、アンケートもぞんざいになってしまう。

(木村) それもありえますね。第 1 回の冒頭で、フォーラムに何を期待するか話してもらったときも、「市民の声を聞いて学びたい」という人は 2、3 人でしたから。あとの人は、分かりやすく伝えたいとか、会話したいというご意見だったと思います。どちらかというところ、「伝えたい」がメインで。本当はそこを何とかしたいのですけれども。

なので、今日は次々回（第 5 回）のテーマ案を考えますけれども、その辺りも少し念頭に置いて考えていただければと思います。

では、次の方。

—— 全体としては安定してきた感じがします。その上で、いろいろと細かいところを言いたいと思います。

前回、私は割り込む人が多いという話をしましたが、やはりよくしゃべる人ほど割り込む傾向が強いようです。だから、よくしゃべる人は注意してみているほうがいいと思います。

(木村) それは専門家に限らずということですね？

—— そうということです。

あと、アンケートに「話が長い人はファシリテーターが止めたほうがいい」という意見がありましたが、それに関連して、今回はタスクが多かったので、「ちょっと待ってください」と言って話を止めるシーンが何回かあったと思います。流れを確認させてくださいと。あれは別に長い話を止めるためにやっているわけではないと思うのですが、話の流れをちゃんと把握するためにはいいと思います。そういうときに書いている付箋は、的を射たコメントが多かったのですが、反対に、ダラッと流れているときに書いている付箋は、たまにピント外れのものがあったり。やはりオーバーワークだったのかなと思います。

それは、サブファシリテーターが悪いわけではなくて、たぶん機能の限界として把握しておくべきことだと思います。人間の能力の限界といたらいいのでしょうか。フォーラムのシステムの展開を考えると、「日本に 10 人くらいしかできる人がいませんけど」という手法を提案しても仕方がないわけで。あのくらいのタスクになると、回せる人はあまりいないのではないかと、という意味です。

あと、前回の反省会で、最初に話す人は段取りを把握するのに時間がかかって不利だった、という話がありましたけれども、逆に最後の人も不利だったと思いました。7分かける3って21分だから、どう考えても最後の人が不利。その辺りの段取りについては、前回の研究会では、7分でいいよねってさらっと決まってしまうんですけど、本当はもう少し段取りを練ればよかったかなと。

(木村) 私の中では、少くくらい延長してもいい、休憩が短くなるけれども、くくらいのつもりだったのですけれども、休憩のほうを優先していたので。すんなりと休憩に入っていたので。まあいいけどねと思いがらいました。

—— 第1回だったら、ダラダラとやっていたのかなという気もするのですね。第3回になって、参加者もなんとなく、時間はちゃんと守らないと全体が回らないという意識が出てきたのかなと思います。

あと、7分かける3で21分というのが既に計算として間違っていて、段取り確認で2分くらいかかるので、そこから7分、7分、7分といくと、1~2分のオーバーではなくなってしまうのですね。残り5分ですと言ったときに、2人目がまだ終わっていなかったの。

(木村) そうですね。6分ずつにすべきでした。

—— だから、そこら辺も考えた時間割にしないと、不公平になってしまうと思いました。まあ、第4回は個人に対してという話ではないので、いいのかなとも思いつつ。以上です。

(木村) はい。では、次の方。

—— 1人が長く話しているのを、止めなきゃと思いながら、止められなかったのを終わった後も悔やんでいました。今後はしっかり一言言えるようにしたいと思います。

あとは、ごめんなさい、ちょっと思い出せないです。とりあえずそれだけです。

(木村) はい。アンケートの中にもそういう指摘があるので、よろしくお願いします。

ただ、次は参加者にファシリテーターをやらしてもらおうと思っています。そんなに複雑なグループワークではないので。

—— 途中で止めるのは難しいですね。

(木村) ええ。でも、そこは参加者の方に頑張ってくださいと。

では、次の方、どうぞ。

(前参加者) アンケートの集計で感じるのは、市民側は何かを分かろうとする態度が皆さんの中にあるんですね。理解できたことがうれしいという言葉が多い。

ところが、専門家の方は、市民に分かってもらうということよりも、専門家同士の、専門が違うという意見がとても多い。Q3にある「何度もQ&Aを繰り返せば」というのは、すごく大事なことだと思うのです。専門家の方に本当に考えていただきたいことだと思うのです。専門家同士云々というよりも、それがとても大事なような気がします。今回は、専門家の中で、専門が違うからという話が多すぎるような気がするのですけれども。

それから、前回反省会のときに言わなかったことですが、専門家の方が、どうしたら市民の方に分かってもらえるのだろうか、とても苦慮なさっている場面がありました。それで理解できないことがあっても、どういう言葉を出せば市民の方が理解してもらえるかという努力はしていただきたいなと思いました。

—— 専門家がそこにたどり着くと、しめたものですね。

(木村) 専門家が市民にどう向き合うか、とでも言えばいいでしょうか。そこにもう少し意識が向くようになるといいということですね。

(前参加者) 市民は、どうにかして理解しようとしてきていると思うし、親近感を感じたというような言葉が多いのですけれども。それに対して、専門家は専門家同士で何かを考えているという感じがします。

—— 市民から出てきたのはこういう質問だったけれども、市民は技術的なことよりも、こういうことを知りたいのだろうな。だったら、こういうことを説明すると分かってもらえるかな。専門家には、そういう質問のブレイクダウンをしてほしいですね。

(前参加者) それが大事だと思います。

—— そこに気がつけば、コミュニケーションが進むと思うのです。

—— 質問したいのですが、専門家が説明に苦慮されていたとありましたが、そのきっかけになったのは、市民の方が「分からない」と言ったのですか？

(前参加者) その班では、1人の市民の方がバーッと意見を出したのですが、それがきっかけだったと思います。

—— 「分からない」という意思表示をしたのですか？

(前参加者) そうです。その方がいろいろな質問を投げかけて、ちょっと突っ走ったところもあったけれども、でもその1つ1つの言葉で、専門家の人が、ではどういう言葉を出せば分かってもらえるだろうかという感じで苦慮されていて、後ろから見ていて、いいなと思いました。

ある意味で、市民の方が突っ走ったのはよかったのかもしれないですね。

—— つまり、市民が「分からない」という意思表示をしないと、専門家の方もそこに気がつかないということですよ。

—— 先ほども議論があったけど、市民の側から突っ込みをガンガン入れたほうがいいのですけどね。市民の方はジェントルな方が多いので、少し遠慮してしまうのです。

(前参加者) 去年のほうが個性が強いですよ。私も含めて。市民は聞きたいために参加しているわけだから、たくさん聞いていいと思うのですよ。今回の市民の人は、優しいなという気がしているのですが。

—— あんな説明じゃ分かるわけがないのにと思っている、納得してしまうというのは、不思議な感じでした。本当はそこで突っ込みが入るはずなのに。

(前参加者) まあ、たった 1 人の突っ込みでしたが、でも、専門家の人に届いたわけですから。

—— それはよかったですね。

—— 総じて赤シールが少ないですね。A 班は 2 つ、B 班は 2 つ、C 班は？

(木村) 一番上に 1 つですね。

—— 赤シールを貼るのは、遠慮してしまうのでしょうか。

(木村) 一通り話を聞いて納得した、という言い方をする人が多かったと思います。

—— 私は、「納得した」ではなくて、「満足した」だと思うのです。自分の質問に答えてくれたという満足感。納得はしていないと思うのですけどね。

(木村) その辺が、例えば A 班は、最後に「それはかなり難しい要求ですね」という回答が出てきて、満足していないという結論だったのですけれども。まあ、この辺は少し落ち着いた頃に分析してみたいと思います。

では、次の方。

—— アンケートの印象ですけれども、Q1 で、専門家の方で「市民の疑問を掘り下げることができた」とおっしゃっている方がいて、そういうことができた人がいたのかと思いました。それは大変結構なことだと思います。

ただ、専門家全体としては、市民のほうを向きながらも、なおかつ専門家同士のことも見ている。それがムラなのかなともちょっと思いますけれども。お互いに相手の能力を測っていると思いました。市民は、それが専門家のほうだけに向いていて、自分たちというグループ意識はない。とにかく専門家に対峙しているという真剣さをひしひしと感ずるので、面白い対比だなと思って見ていました。

あとは、C 班の「話してみてもう思ったか」のところ、市民の質問の理由を把握するのが難しい」とか、「背景をつかみ切れていない」とか、話し方に関して一生懸命考えている人がいて、面白いなと思いました。

(木村) 分かりました。では、次の方。

—— まず、書き取るのが大変で、後から見て分からなくならないように、ちょっと長めに書いていたのですね。もう少しまとめたほうがいいのかと思ったのと。

それから、反省会の際に、漠然とした質問を絞らなければいけない、話がかみ合っていないことをいち早く察知しなければいけない、というご意見があって、すごくためになりました。その後、自分の書いた附箋を見てみると、ああ、本当にそうだったのだなとひしひしと思いました。

それから、システム化についてですが、私のような素人が参加して、アップアップしてしまったのですが、システム化していただけると、他の方も、ああ、こういうことがあるのかということを知っているだけでも、かなり違うと思うのですね。心がけてやろうと思うと思うので、システム化していただけるといいなと思いました。

それから、専門分野という話がたくさん出てきていて、専門家の方は責任感が強いなと思ったのですね。数字が違っていたり、違うことを言ったりしたら大変だ、どうしようということを重視されていて、はっきりしたことをおっしゃれなかったのだと思います。

はたまた、それぞれプライドを持った専門分野があるわけですよね。それがひとつずつパーティションのようになって、壁になっているのかなとちょっと感じてしまいました。それを市民側から全体として「ひとまとめの専門家」として見たときに、細かい壁がある専門家に対してどう思っているのかなというのを知りたいなと思いました。以上です。

(木村) はい。書き取りのレベルについては、この前の反省会のコメントなどを参考に、頑張っただけだと思います。でも、全然駄目ということではないので。後で見てよく分かるように書いておいてもらうのはいいことなので。

なんか、市民の人たちに、専門家の中でも力関係が何かしらあるということが見えてくるような機会ってないですかね。「ああ、専門家の人たちって、私たちのことも見ているけど、それと同じくらい専門家同士でも牽制し合っているのか」みたいな。

(前参加者) それに気づいてくれるといいなと思うのですけれども。

—— 私は、次回の冒頭に木村先生が一言言ったほうが良いと思っているのですけれども。

(木村) 何をですか？

—— 「専門家の皆さん、専門家同士ではなくて、市民の方と向き合ってください」。

—— 逆に、市民の人たちにそういう視点を与えてしまいませんか？

—— いや、そうしないと気がつかないで終わってしまうかもしれないですね。

(木村) 竹中君、どうですか？

(竹中) 少し考えさせてください。

(木村) そこを自然と気づいていくプロセスが研究のプロセスなので。

(竹中) それが自然にできるのが一番望ましいですね。

—— でも、どうやったら気がつくのだろう。

(前参加者) 難しいですね。アンケートの集計を読むと、市民側が突っ込めていないような気がするのですけれども。突っ込んでいかないと、専門家同士の、というところまで見えてこないのではないかと思うのですけれども。

—— 傍から見ると、かなり専門家同士はあらわにしていると思うのですけれども。冷や冷やするくらいなのですか。市民の方は気がつかないのでしょうか？

—— でも、Q3に書いているように、気がついている方は気がついてますよね。専門家同士のほうが気がついていない。

—— ああ、そうか。気がつくということも研究テーマなのですね。

(竹中) 言って分かってくれる人たちだったら、最初から分かるんじゃないかという気もするのです。自分の経験としてどこかで学んでくれないと、本当の意味では変わらないのではないかと。

(木村) 第4回はそのままやってみて、また同じようなことになったら、最終回は、言ってみても同じかどうかを検証するというのはひとつの手です。言っても無駄なんだな、あるいは、言えば分かるんだな、ということが分かる。

—— 第1回のときに皆さんが感じた問題点が、第3回が終わってもまだ尾を引いているというか。今回は、市民の意識レベルが非常に高く、専門家の人たちの意識にちょっと

問題がある。それがいまだに継続している。それが Q3 の答えにもまだ残っている。

—— このアンケート集計結果は渡すのですか？

(木村) 渡しません。

—— これを見ると、言わなくても分かるかなと思って。

(木村) もう少し N が大きければいいのですけれども、これくらいだと、匿名にしても、誰が書いたのか分かってしまうのですね。

では、次の方。

—— これまでの 3 回の、フォーラム冒頭の一言コメントについての感想ですけれども、今回の参加者の皆さんは、あまり自分の中身を出さない感じがします。Q1 の専門家の意見でも、「市民の方々が『会話のキャッチボールができた』」とあって、「多様な意見を聞いたこと」とありますが、じゃああなたはどうか、みたいな。そこを書いてほしいのにというところを、書かないし、語らないなというのが、私が気になっているところなんです。

それから、Q2 の専門家の回答で、「市民の興味は原子力発電、福島に特化しており、当方が専門家としての知識が足りず、議論が消化不良だった」。これを専門家の人が「気づき」と思ってくれたらいいなと私は思っています。つまり、市民の人たちは、抽象的な原子力の安全というよりは、やはり原子力発電、福島、3.11 のときの原子力発電のことを知りたいと思うのですね。去年のフォーラムもそうだったのですけれども、専門家の方が、ご自分の専門から安全性とかを説明していこうとする。だけど、市民の人は、そうは言っても起きてしまったじゃないかというところから動いていく。そのかみ合わなさを、去年の専門家の方は何人か気づいたみたいですが。

それが、「専門家としての知識が足りず」という受け取り方をしているところが、少し気になります。この人はオールマイティを目指しているのだろうか。「知識が足りず」の「知識」の意味は何だろうか、とずっと考えているのですけれども。

例えば、1 人の専門家と 1 人の市民の会話になってしまったときに、それはそれで深められたかもしれないけれども、そこで別の市民から別の視点の問いかけがあったら、回答の道筋ができたのではないかと思ったりするところもあって。そういういい機会だったとは思っています。

専門家も、専門によって説明できることが違うかもしれない。「できないということも理解できた」という市民のご意見もよかったと思うのですけれども、一方で、専門家の方が、全部自分が答えようとするのではなくて、答えられないときにどうするかということも少

し考えていただけるといいなとは思いました。以上です。

(木村) 難しい話です。一方で、分野が違うからといって答えない人が多いという問題もあって。どちらをフォローしていくのかというのは、すごく難しいと思うのですよ。

—— 例えば京都大学の小出さんとか、アンチ原子力のプロフェッショナルが質問しているのなら分かるのだけど、普通の市民の方が質問しているのに、それに対して「私の専門じゃないから答えられません」というのは、私からすると信じられない。そんなことにも答えられなくて専門家になって、恥ずかしくないのか。だから、そこに気がついて今後の専門家人生で心構えが変わってくれば、このフォーラムも役に立つかもしれない。

だけど、Q3にあるように、「誰が説明するかが大事」、そういう専門家を揃えなければ駄目だ、みたいところに持っていくのだったら、まったくその人の意識改革はゼロだなど。

こういう議論が中であつたと思うのだけど、そのときに本当なら赤いシールを厳しく貼って、「別にそんなに専門的なことを聞いているわけではない。あなたの知識レベルでいいから説明してください」というふうに、どんどん突っ込んでほしかったですね。分野が違って、答えられないわけがないと思うのですよ。

(前参加者) 市民としては、そんなに詳細なことは要求していませんので。

特に、3.11があつて、福島というのは我々にどつと来ているわけですよ。

—— あれだけのことが起きているわけだから、専門家だつて新聞くらい読むし、ウィキペディアくらい読むわけだから、そのくらいのことは当たり前市民レベルで勉強してほしい。

(前参加者) ただ、私は逆に「専門家としての知識が足りず」と感じられたことは、すごく大きいと思うのです。

—— それで、「このくらいのことにも答えられなくて恥ずかしかった」と書いてくれれば。

(前参加者) そうしたら、花丸ですね。

—— 今のお話は、専門家同士の壁の話ですよ。どうも、それを逃げ道にしている専門家がが多いところが気になる場所ですね。

—— すみません、もうひとつだけ。Q3の「何を説明するかよりも誰が説明するかが大事な要素になると感じ、少し悲しい」という感想が、私の中で引っかかっています。コミュ

ニケーションというのは、何を話すかではなくて、どのように話すかだということはよく言われるところだと思うので。「悲しい」というのがどういうことなのか、気になっていません。気づきなのか。それとも本当に悲しいと思っているのか。自分は向いていないと思っているのか。気づいてくれるといいなと思います。以上です。

(木村) はい。では時間もないので、次の方に行きたいと思います。サブファシリテーターにならず、全体を見ていたお立場から。

—— 反省会でも申し上げたのですが、話が深まらなかったとか、専門家にもう少し気づきがほしかったという部分については、システムとして整えることも大事ですけれども、ファシリテーターをした皆さんがもうひとつ突っ込むことで、それができたのではないかと見ていて思いました。そこが惜しかったなと思います。

質問を明確にすると同時に、専門家の回答がよく分からなかったときに、「それで分かったのですか」と一言言うだけで、その次の回答に導くこともできる。「今の説明では分かりませんので、もう 1 回、丁寧に具体的にお願いします」と言うことくらいは、ファシリテーターとしてできたのではないかと思うのですけれども。付箋を見ても、そこまでは至っていなかったなと思います。

それが本来はシステムとして必要なのかもしれないけれども、当日くじでいきなりファシリテーターになった人には、そこまでは無理なわけじゃないですか。だから、やはり長年ワークショップでいろいろお手伝いをしている皆さんが、本当はそこまでできたらよかったなと思いました。

ただ、そうすると、今度はこういうシステムで話し合いをするときに、どういう人がファシリテーターをやるかということが大事になってくる。ファシリテーターが何を目的に、どういう話し合いをするかということが明確になっていないと、それは非常に難しい。いきなりの方がファシリテーターをしてもできるシステムにするのか、そうではなくて、ある程度の技量の方がファシリテーターをやることで、変化が起きるようにしていくかというのは、今回の研究の結果として、きっと先生がいろいろお考えになるのだろうと思いました。

私は、前回はいいチャンスだったから、もう少し頑張ればファシリテーターをやった皆さんにも気づきがあったのではないかと感じて、ちょっと残念だったと思います。それが、自分がやっているときは見えないのだけど、遠くから見ていると非常によく見えたというのが、ああ、そういうことだなと思いました。以上です。

(木村) はい。まあ、第 4 回はまた違う設計になっていますけれども、このプロジェクトではないところで、何かできるといいのかなとは思っています。

では、最後に、突然ですけれども、何か一言あれば。

—— 遅れてきてすみません。前回は専門家の方がレポートを作ってきましたが、それを見て思ったことがあります。自分にも跳ね返ってきているのですけれども。

若いときに、私は研究員だったわけですが、出ているレポートも正しいかどうか批判的に見なさいと指導されたのですね。一般の人にとっては、ある人がレポートを書いたら、金科玉条的にこれは正しい、全てこれでいいと思ってしまう。自分も論文を書くときに、「この人が言った」とか書きますけれども、そのときにもう1回正しいかどうか、批判的に見ないといけないなと思いました。

(木村) はい。では、前回の振り返りはここまでにして、少し休憩を取りたいと思います。

2. 第4回フォーラムについて

(木村) では、後半を始めましょう。

次は第4回のフォーラムについてですが、まず、状況から言うと、専門家はおそらく3名休むことになると思います。市民のほうは、今のところ連絡がありませんので、全員来るのかなど。あとは、予報によればぎりぎり大丈夫だけど、台風の問題もあります。

それで、第4回はテーマが「原発は必要か」なので、専門家が2人ずつになるときつかなどと思っています。それなので、2グループにしたらどうかと思っています。どうでしょうか？ 3グループではなくて2グループにして、専門家が3人、3人、市民は4人、5人で、7人、8人のグループになる。

で、これはその場で調整できないこともないのですが、難しいですよ？

(竹中) 3グループと2グループの切り替えは、その場での調整は厳しいですね。

(木村) そういう話なので、3グループに分かれるか、2グループに分かれるか、決めたいのですけれども、どうでしょうか。

—— 市民の満足感はどうなのでしょう。人数が多いか少ないかで違うかもしれない。

—— 2グループだと、専門家3人と、

(木村) 専門家は3人ずつで、市民は、全員来ると4人と5人になります。

(竹中) 8人になると少し多いなという感じはあるのですが、「必要か」というテーマで専門家が2人だと厳しいのではないかとこのことがあって、2グループにしようかと少し考えていたのですが。

—— 2グループにした場合、人数がだいぶ多くなるじゃないですか。そうすると、書き出したりするのが大変なのでは？

—— サブファシリテーターは3人ずつ入れればいいから、大丈夫ですよ。

—— 8人と3人で11人って、あのテーブルで入りますか？

—— テーブルを増やせばいいと思います。

—— 1班の人数は増えますけれども、共有の時間は、2班になるわけだから、

(木村) (1班あたりの時間は) 少し長くできます。

—— あるいは、今までと同じ時間でやるのだったら、話し合いのほうに時間を持っていくこともできますよね。

—— 今回は、内容的にメンバーの入れ替えはないですよ。

(木村) ないです。

—— サブファシリテーターが3人ずつ入るなら、相当余裕ができますよね。時間管理とファシリテーションそのものを支えるほうに集中できる人が1人確実にできるから、そうしたらだいぶお支えできるかなと。

—— 話を回すほうはだいぶ違うかもしれない。
ただ、8人いると、1人が話す時間は減りますよね。

—— ファシリテーターは専門家じゃないほうがいいですね。

(木村) それは公平にするつもりです。どうせグループワーク1と2があるから。

—— 専門家3人の中の1人がファシリテーターになったら、2人しか残らないですが。

—— まあ、ファシリテーターといっても、自分の意見をしっかり言っているから、大丈夫です。

(木村) そう、あまり厳密なファシリテーターではないから、大丈夫です。ただ、例えば前半は市民がファシリテーター、後半の質疑応答は専門家がファシリテーター、とかはできます。

では、グループの数も考えながら、先に F6-8 を見てください。今回は、グループワーク 1 が 70 分、グループワーク 2 が 30 分の予定です。

グループワーク 1 は、2 つ案を作っています。まず、2 案のほうを見てください。これはシンプルです。テーマについて意見を書いて、その後 40 分間話し合う。その後グルーピングもしっかりできるというスタイルです。でも、どちらかの意見に全部固まってしまうと、もうそれで動かなくなって、自分たちの心地いい意見だけを考える回になってしまうおそれもあります。

それでいろいろ考えて、1 案を提案しています。1 案は、グループワークを 2 回するスタイルです。前半は、原子力発電を必要と思う理由を整理します。自分は必要ないと思っても、必要と思う人がなぜ必要と思うのかを考えて書いてください、という形です。10 分で意見確認をして、15 分間で意見を言い合って、グルーピングして、見える化することです。だから、10 分間で書いて発表して、その後 25 分間で自由に意見を言いながらグルーピングするということになります。ここまでで半分です。

後半の 35 分は、今度は原子力発電を必要ないと思う理由を整理します。必要だと思っても、必要ないと思う人がなぜ必要ないと思うのかを考えて書いてくださいということで、同じスタイルでやっていきます。

必要とか、必要でないとかは、どうせ答えが出ないし、こちらで答えを誘導しても仕方がないので、必要と思うときはこういう理由がありますね、必要でないというときはこういう理由がありますね、というのをそれぞれ話し合ってもらって、どちらの立場がどういうことを考えているのかがちゃんと分かるようにしたらどうだろう、というのが 1 案です。まあ、やること自体はそんなに複雑ではないので、このくらいのファシリテーションだったら、くじで当たっても大丈夫だと思います。

ということで、グループワーク 1 をどうしましょうかというのが次の話なのですが、いかがでしょうか。

—— 1 案は、自分の意見とまったく関係なく、とりあえず思いつくことを書けばいいのですか？

(木村) 例えば前半は、必要だと思っている人は自分の意見を書けばいいのですけど。

要らないと思っている人は、必要だと思う人の心を想像して書くことになります。

—— あんなことを言っていたなとか、そういう感じで書けばいいのですね。

(木村) はい。

—— 要らないと思っている人が書いた、ということとを区別する必要はないのですか？

(木村) それをすると、この人は要らないと言っている、この人は要と言っている、ということになるので、あまりやりたくないのです。

—— あと、もうひとつは、次回は「原子力発電所なしで電力は『本当に』足りるのか？」というテーマも一緒に乗っているけれども、この案で網羅できるのですか？

(木村) 原発が必要かどうかということのひとつの理由として、本当に電力が足りるのかどうかという議論ができますよね、という話もあったので、まあいいかなと思います。
どうでしょうか？

—— 2案だと、自分が必要だと思ったら必要って出すし、必要じゃないという人は必要じゃないというのを出すので、誰がそう思っているかは、2案では分かりますよね。

(木村) 2案だと分かります。だから、逆に言うと、2案の場合はこちらで人をコントロールしないと、大変なことになる可能性があります。くじ引きでやるとかえって危ないかもしれない。

—— それこそ、順番に発言が回らない可能性もあるわけですね。反対賛成の人が言い合っちゃうみたいなの。

(木村) あと、毎回取っているアンケートの結果で今日は分けました、という言い方をしなければいけない。それは嫌なので。

—— でも、必要・不要の意見を聞いても、あまり面白くないですね。どうしてか、という議論がちゃんとできないと。その先が本当は大事ですね。

—— その意見を聞いた後に、一応意見交換の時間はあるわけですね。

—— いや、2案のやり方のときに。

(木村) ただ、1案でも同じなのですからけれども、その後の意見交換がどういうものになるか、私の中で想像がついていないのですね。

例えば、必要だと思っている人が、必要と思う人はこう思っているのではないかと想像して出した意見に対して、「いや、そんなことは思っていない」と言うのか。「ああ、そういう考え方もあるのか」と言うのか。そういうところで面白い議論になればいいのですけれども。

—— 例えば、原子力発電が必要ないと思う理由の中に、「今も原発が止まっているのに、3年間なんとかやってきているから大丈夫だろう」みたいな理由があったとしますよね。それに対して、誰かが「そんなことを言っても、火力発電所はひいひい言いながら動かしていて、すごいリスクが高まっているのをあんたは知らないのか」と言って、応酬が起こる可能性はありますよね。

(木村) 逆に言うと、そういう応酬が出てきたときに、それをどのように「必要ない理由」として整理をするのか。そこなのですよ。そこが今一歩見えていなくて。

—— けなしあいになったら嫌ですよ。正しい意見の応酬ならいいけれども。

(木村) 「いや、そんな理由は必要と思う理由にならないよ」とか言ってくれればいいのですけれども。

—— ベストミックス的に、両方のほうから中庸な意見が出てくる可能性もありますよね。

(木村) 竹中君、どう思いますか？

(竹中) うーん。まあ、つぶしあいになると思うのですけれども。このテーマを選んだということは、それを望んでいるのではないかと。

—— それでも、反対の立場になってみるというのはいいですよね。

—— それはいいと思います。

—— 自分の意見とは関係なく、分けてしまったらどうですか？ ディベートみたいに。

—— 必要班と不必要班みたいだね。

—— 本当はそれが一番面白い。あなたが思っていることと違うチームに入ったとしても、そちら側のチームで戦ってくださいと。

(木村) うーん。

—— そうしたら、「話し合いのルール」は要らないですよ。

(木村) そうなります。ディベートは、いやあ、面白いのですけれども…。

—— ディベートは、結局うまくいかないのですよね。対立したままで終わってしまうのですよ、いつも。

—— ディベートじゃないまでも、ロールプレイングでやってみたほうがいいのではないですか。

—— それだったらできるかもしれないけれども、ディベートはちょっと。

—— でも、いきなり今日はこうですと言われて、できるものですか？

—— できますよ。

—— ロールプレイングはそんなに難しくないですよ。

—— 経験があったほうがいいですよ。初めての人は面食らうと思いますよ。

—— あと、「自分の意見を言いましょう」というルールを書いてある中で、それは、

(前参加者) そう、違う意見を出さなきゃいけないのは結構苦しいですよ。

—— このテーマを選んだ人で、自分はこういうことを聞いてみたい、こういうふうに言ったらどういうふうに答えてくれるのか。そういう思いを持っている人は、もしその思いを出せなくなると、ストレスがたまるかもしれない。

(木村) そうしたら、必要と思う理由を出した後にグルーピングだけして、次に、必要

ないと思う理由を出した後にグルーピングだけして、それらを見てどう思うか、自由に意見を言う、という形にしますか？

—— ああ、そうするとまとめて 30 分間話ができるということですね。

(木村) そうということです。最初はどちらの立場にもなって、理由を書いて、グルーピングしてみる。例えば、模造紙を半分に区切って、半分は原子力発電を必要と思う理由のグループ、もう半分には必要ないと思う理由のグループが出てくる。それをホワイトボードに貼って、それを見ながら、本当に必要かどうかという話を、残り時間でディスカッションする。

—— ロールプレイングではなくて？

(木村) ではなくて、自分の考えで。

—— それはいいかもしれないですね。

—— 自分が思ってもいなかった必要という意見も聞いて、あるいは、自分が思ってもいなかった不要という意見も聞いた上で、どうかということですね。

(木村) ええ。その上で議論してみる。そのほうが明確になるかな。

—— ということは、最初の必要と思う、必要じゃないと思うというところで、たくさん付箋が出ていたほうが良いということですね。

(木村) で、このスタイルでやるときに、専門家が 2 人だときついと思ったところもあって。なので、専門家は 3 人ずつ配置したい。そうしたら、そんなふうに組み替えて、2 グループでやりましょうか。

—— 2 グループじゃないと駄目だと思います。少ないとできないと思います。

(木村) たくさんの方が集まれば、書いた付箋もたくさん出てくるので、グルーピングもしやすくなりますし。

—— これは、最後に結論は出さなくていいのですよね？

(木村) 出さなくていいと思います。

—— なんか、結論を出さなきゃいけないと思いついてしまいそうで、心配です。

—— これはどんな人を連れてきても答えは出ませんから。

(木村) ええ、たぶん大丈夫だと思いますよ。イエス、ノーを決める必要はないので。

(前参加者) どう思っているかという形になるのですよね。

(木村) はい。そのくらいしかないと思うので。答えは出さなくていいけれども、答えを見つけるためのいろいろな考え方とか、いろいろな側面を気づいてもらうということを目的に。

—— ということは、最初に必要と思うと理由と必要でないと思う理由を付箋で書いていただいたときに、また番号付けが必要ですね。

(木村) そうですね。

—— で、後半の意見交換は、「アに対してどう思う」という意見を書いていかないと、関連が分からなくなるから。

—— たくさん意見が出てくるとは思いますけれども、優先順位づけはしないのですか？

(木村) グルーピングするだけです。

—— そうすると、後半の意見交換で、どこに話題が飛ぶか分からないですね。

(木村) そうです。

—— サブファシリテーターに対してあまり厳しいご意見が出ていないので、ファシリテーターを支えているサブファシリテーターが、何気なく、一緒にグルーピングしたり、分かりやすい表示をしたりすると、少し目が飛ぶかもしれませんね。少し作為的かもしれないけれども。

(木村) そこまでやるとファシリテーターになってしまうから、気になります。

—— そうですか。分かりました。

—— でも徐々に、グルーピングをしたほうがいい、タイトルをつけたほうがいい、みたいな感じがありますよね。

(木村) そうですよ。だからできると思うのです。

—— グループ間の質問の時間はないのですか？

(木村) あります。共有して、その後質疑応答の時間を取ります。

—— たぶん、必要だというほうも要らないというほうも、5つの意見のグループになると思うのですよ。セーフティとセキュリティとエネルギーとエコノミーとエンバイロンメント。まあ、その他にも出てくるともっと面白いですけども。

(木村) まあ、蓋を開けてみないと分からないですけども。必要のほうではセーフティは理由にならないかもしれない。

—— そうか。必要のほうではセーフティでは出てこない。要らないのほうで出てくる。

—— 分かれる気がしますよね。

(木村) ええ、理由が分かれるでしょうね。まあ、開いてみないと分からないです。もしかしたら、火力よりは実は安全とか、そういう比較論、あるいは、比較論対絶対論みたいな話が出てくれば面白いかもしれないですけども。

では、最初に理由を整理した上で、それを見て全員でディスカッションをします。そのほうが面白く盛り上がりそうなので、それでやりたいと思います。少し作り変えてきます。

3. 第5回フォーラムについて決めておくこと

(木村) できればグループワーク1は70分間取りたいのですが、そのためには、第5回のテーマについていろいろ考えないといけません。

つまり、第5回は我々のほうで題を決めさせてもらって、それで話し合ってもらいたい。F6-9の資料でいうと、元々は、0番「もう一度考えよう。『原子カムラ』とは何だろうか？」

を第5回のテーマにする予定ですよと言っています。ですが、第1回、第2回でかなり原子力カムラの話は充実してきているので、もう1回というのはちょっともったいないなと思っ
ているところもあって。

ということで、今考えているプログラム案では、次回のテーマについて説明する時間を
10分取っています。今まではテーマ決めに20分取っていますが、運営側で数個テーマ案を
提示して、投票してもらっただけにしようかなと考えています。その方針でよろしいでしょ
うか？

—— F6-9を配って、人気投票をすると。

(木村) そういうことです。まあ、全部ではないです。10数個もあつたらばらけてしま
うので。せいぜい5個ですね。

では、次回のテーマの決め方はそういう進め方にしたいと思います。

次は、次回のテーマとして出すものを、この中から5個くらいに絞りたい。0番は一応出
しておかないといけないかなと思います。だから0番は置いておいて、プラス5個に絞
りたい。ちょっと多いですか？

—— いいと思います。各班から2つずつ出すのと同じ数ですから。

—— 0番以外で5つ、合計6つということですね。

(木村) はい。では、3分くらい時間を取りますので、各自読んでください。今追加され
たテーマ案もいくつかあるので、それはその後で読み上げます。

(各自資料に目を通す)

(木村) いかがでしょうか。

あと、参考として、F6-6の最後のページに、参加者から出された今までのテーマが全部
載っていますので、この辺も参考にしてもらってもいいかなと思います。原子力にかなり
特化しているところもあるのですけれども。

あと、追加でいただいたテーマを読み上げますと、1つ目が「地球温暖化と私たちの暮ら
し」。かなり1番に近いですね。2つ目が「食糧自給率と食品ロスを考える」。食品の話です。

—— 理由はいいですか？

(木村) 理由をどうぞ。

—— 1つ目の「私たちの暮らし」というのは、1番の「地球温暖化に対して、私たちは何ができるだろうか」と、11番の「環境にやさしい言動とは？身のまわりから考えてみよう」を合わせたような感じです。私たちの暮らしの中で何ができるかということと、暮らしの中で何ができるかだけではなくて、こういうことも考えられるという意見がそこで出ることが大事なかなということで、「私たちの暮らし」としました。

2つ目の「食糧自給率と食品ロス」は、実は日本の食糧自給率はもう4割を切っている。海外の輸入にすごく頼っているわけですね。それは、バーチャルウォーターといって、水の輸入にかかってくるのです。そこまでなかなか知る機会がないということと。それに引き換え、日本で1年間に生産されるお米の量に匹敵する量を、私たちは、食べられているのに捨てているのです。そういう意味で、食料を考えることが生きていくという上ではどんなに大事かということで、食料から考えると、原子力も考えられるのではないかなと。

—— そうすると専門家は、

(木村) いや、だから、同じ土俵で話すために選んでいるので。これが選ばれたら、その日の懇親会は残さずに食べられますね。

次は、そちらの方から出されたテーマ案ですが、1つ目が「教育について。塾は必要か」。2つ目が「モラル、自転車の盗難」。3つ目が「社会、ごみ処理場」です。何か一言ありますか。

—— 男女、年齢、それから誰も専門家にならないようなテーマにしたいと思って、考えました。身近過ぎて皆で議論するにはどうかとも思ったのですけれども。自分のことではなくて、将来世代について、塾のこととか、モラルのこととか、先のことを考えられるからいいかなと思って出したのですけれども。

(木村) はい。では、他に追加がある方はいらっしゃいますか？

—— 私の案は、5番とほとんど同じなのですが、表現の仕方が少し違うかなということで、リスクコミュニケーションには違いないのですけれども、緊急時における情報提供とか避難行動のあり方について話し合えたらいいかなと思いました。

緊急時は、大勢で寄り集まって話し合っている時間なんて全然ないわけで、福島の場合も、情報が錯そうして、避難しなければいけない人が右往左往したり、結果的にお年寄りや重病人は避難しないほうがよかったのではないかなという疑問が今もずっとありますよね。

そういうことを含めて、放射線被害だけでなく、日本は災害列島ですし、地域によっても違うわけだから、地域、地域で、住民同士、住民と行政、あとはもちろん専門家を交え

て、意識や情報の共有ができていないか。緊急時には話し合う時間はないわけだから、そのときにどのように行動できるかを、日ごろ準備するような話し合いの仕組みがあったらいいなと思いました。

—— 情報提供のあり方ですか？

—— そうですね。情報提供と、それによる避難行動ですよ。

—— それは情報提供と避難行動について話し合うのですか？ それとも、そういう仕組み作りについてですか？

—— 仕組み作りです。

—— 昨日、沖縄で 5 万 5 千人に避難勧告が出たというから、避難の話は、原子力に限らず、これから日常茶飯に起きる可能性があるから、大事なことですよね。

(木村) では、他に、これはどういう意味ですかというような質問はありませんか？ もしくは、これとこれはまとめて 1 つにしましょうとか。

—— 1 と 11 は一緒にいいと思います。

(木村) 1 と 11 と、あとは「地球温暖化と私たちの暮らし」を 12 番にして、

—— 1 と 11 と 12 は一緒にいいと思います。

—— 表現はどうするのですか？

(木村) 表現は、ある程度決まったら考えます。他はどうですか？

—— 出してもらった人の真意によるのですけれども、7 と 10 は割と似ていると思います。

(木村) 7 番を出したのはどなたですか？

—— 私です。似ていると思います。

(木村) 10 番は？

—— 私です。

—— 10番は、相手に「納得してもらえる」伝え方というよりも、相手に「共感してもらえる」伝え方のほうがいいと思いますね。

—— 「相手に伝わる話し方」とか。「聞き方」と揃えるなら、「話し方」でもいいかも。

(木村) 7番は、話し方の議論ですか？ もう少し広いような。

—— 生き方ですね。

(木村) そう、もう少し広い話かなと思って。その中に話し方もあるけど、むしろ、話し方は話し方でやるべきなのか。

—— 市民のあるべき姿って、本当にあるのかな。専門家については大賛成ですね。市民ってものすごくブロードだから、

—— だからここで言っているのは単なる市民ではないのでしょうか？ 意思ある市民。

—— うーん。私としては、例えば、「9割は無関心というのが市民のあるべき姿ではないか」という結論が出たら、それはそれでもいいと思うのです。悲しい結果ではあるけれども。そういう話し合いになってもいいのかなと思うのです。

(木村) ああ、「分からないから無関心、専門家に任せるのがいいのか。自ら学ぶべきなのか」というのは、そういうことですね。

—— ということですか。第1期の「無関心は本当に駄目なのか」に、ある意味では近いかもしれません。

—— 10番については、私は「話し方」というより、「伝え方」のほうがいいですね。「話す」に限らないですし。

感情的にならないで、信頼関係があった上で、あなたの意見に反対です、賛成ですとちやんと言えるような。理解し合いながら、というのがいいなと思います。

—— なんか、このフォーラムの終着駅みたいな話ですね。

—— うーん。1回感情的になってしまっても、次は理解し合える、じゃないでしょうか。感情的になるのは駄目と押さえるのはあまりよくないと私は思うのだけど。

—— 10番は、前回専門家の方からこういうテーマ案が出たので、もったいないなと思ったので、それを活かさないかなと思って出しました。

—— 7と10は一緒にしますか？

—— 10は具体的な方法ですね。

(木村) うーん。そうですね、方法に近い。

—— あ、なので、10番は専門家と市民というより、人としてというベースで話したらいいかなと思います。人と人が意見を言い合う中で、という感じで話し合えたらいいんじゃないかなと。

—— 7と10は一緒にならないということで。

(木村) ならないような気がしますね。似たようなことを言っているけれども、ちょっと違うのかなと。

—— 7は生き様ですね。

(木村) 他はどうですか？

—— 6番に、「事前に宿題として」と書いてあるのですけれども、前回の雰囲気を見ると、よほどのことがないと宿題は嫌がられる気がするのですけれども、どうでしょうか？ これは宿題なしでもできますか？

—— できると思います。

(木村) 6番を出した意図をどうぞ。

—— 意図は、ここに書いてある通りですけれども。専門家がレポートみたいなものを出すと、それを丸ごと信じてしまうとか。話し方が非常に上手だったりすれば、なるほどと

すぐに信じてしまう。そういう人はすごく多い。私は、一方からの情報だけを聞いて、その情報がそうだなと思っても、必ず裏を取るとか、反対の立場の方から聞くとか、最低 3 つくらいの立場の違う情報源から聞いて、最後に自分なりの判断をしたほうが良いといつも思っているのですけれども。あまり騙されたくないから。だけど、意外とそういうことを考えずに、それこそ都合の良い、自分の言ってほしいことだけが聞こえてしまって、取り入れるという人が多いので。どんな情報でも確認することが大事だなと思います。

—— 6 番をやるなら、宿題があったほうが良いと思います。あと、原子力の話ではなく、自分の興味のあることで良いと思うので、そんなに宿題のハードルは高くないと思うのですけれども。

—— 宿題がなくてもできると思うけれども、ちゃんとしたネタがないと、話のとっつきが悪いでしょう。漠然とした噂話だけを出しても仕方がないので。やはりこういう話が報道されていたけれども、結果は実はこうだった。これは嘘だったとか、何か確定したものを出してきて、そこから考えるきっかけにしたほうが良いと思います。

(木村) 例えば、具体的なニュースの例はありますか？

—— 昔、福岡の動物園でライオンが逃げたという事件がありました。A 紙は、ライオンが 1 匹逃げましたと報道しました。B 紙は、4 匹逃げました。C 紙は、ライオンが逃げて、人が食べられちゃいました。全部違うわけですね。事実は何でしょうかと。これをある人の講演で、エビデンス付きで聞いたことがあります。そのときに私はまだ高校生でしたがけれども、非常に鮮烈に覚えています。

—— 食品では、テレビで放映した翌日にもやしがなくなったという例はありますけどね。

—— 今回の福島第一原発の事故でも、噂話が広がっちゃったりとか、根拠がないことをすごく信じ込んでむやみに心配したりとか、そういうことがたくさんあったから、もう少し情報とかメディア報道の読み取り方をスキルアップしたほうが良いのではないかと思います。いつも。

—— ローマ帝国が滅びる寸前に、一番繁盛した商売は、煽り屋です。煽って、一方の側の情報だけを流すという商売が一番繁盛していたそうです。

(木村) さて、では、だいたい一通りでしょうか。

これからテーマ案を絞りますが、もう投票にしましょう。1 人 3 つずつ書いてください。

—— 追加で出されたテーマの番号はどうなっているのですか？

(木村) 「地球温暖化と私たちの暮らし」は 12 番。「食糧自給率」が 13 番。「教育」が 14 番。「モラル」が 15 番。「社会」が 16 番。「緊急時の情報提供、避難行動の仕組み作り」が 17 番。この中で、1 番と 11 番と 12 番は一緒ということにします。

この中から 3 個選んでください。順位はつけなくていいです。今附箋が回っていると思うので、番号を書いてください。

(投票・集計)

(木村) 1 番「地球温暖化」、6 番「メディアリテラシー」、10 番「伝え方」、13 番「食糧自給率」、17 番「緊急時の仕組み作り」の 5 つになりましたので、これで行きたいと思いません。

それでは、題名をブラッシュアップしていきましょう。

「温暖化」は、私は 12 番の言い方がいいなと思うのですけれども。

—— 質問形にしなくてもいいのですか？

—— 「私たちの暮らしの関わりとは？」とか。

(木村) はい。では、「地球温暖化と私たちの暮らしの関わりとは？」でいいでしょうか。

次が 6 番です。題目はそのままでもいいですか？

—— 特に最後の言葉が大事ですね。

(木村) では、6 番はそのままいきます。内容はあとで考えます。

次に、10 番はどうしましょうか？

—— 「伝え方」が使いたいですね。私も「納得」は外したほうがいいと思います。

—— 「相手に伝わる伝え方」。

—— 私も、最初にパッと思ったのは「伝わる伝え方」だったのですよ。でも、日本語としてどうなのだろうと思って、頑張っってひねり込んだのがこれで。

(木村) 「相手に伝わる伝え方とは？」でいいと思いますけれども。

—— 相手に伝わる聞き方、答え方。

—— 「答え方」じゃないでしょう。

—— こちらから話すのと、相手の言うことを聞くのと、両方あるということでしょうか？

—— そうです。双方向。

「答える」だとちょっと狭いですね。

(木村) 「話し方」も、なんか嫌ですよね。だから「伝え方」でいいと思いますけど。もしくは、「伝え方、聞き方とは？」にしますか？ 「相手に伝わる伝え方、聞き方とは？」。では、10番はそれにします。

次が13番です。「食糧自給率と食品ロスを考える」。これはこのままでいいですか？ では、このままでいきましょう。

最後は、「緊急時の情報提供と避難行動の仕組み作り」。避難行動の仕組み作りって分かるかな。

—— 「情報供給」と「避難行動」という言葉が大切でないのであれば、「避難時対応の仕組み作り」とか。

(木村) それをやると、自治体はこんな仕掛けでやります、みたいな変な話になってしまふと思います。むしろ、どういう情報を出し、どう行動するか、みたいな。あ、そうしますか？

—— ああ、それはいいですね。

(木村) 「緊急時にどんな情報を出し、どう行動するか？」にしますか？

—— でも、「仕組み作り」という言葉は必要ですよ？

—— 仕組みというか、私の考えでは、まあ仕組みなのだけど、どんな提供をもって、その情報を基に、どのような避難をするか、ということです。

—— それは、避難をするときに個人がどう判断するかということを行っているのです

か？ それとも、自治体が住民にどのように情報を提供して、どういう行動を取らせるかということまでを言っているのですか？

—— 緊急時は、例えば行政から、こういう状態だからこの地域の人はこちらに避難してくださいって、今は命令できるんですけど。最終的にはそういうふうに一方向的に情報が来ますよね。最後の最後はそれに従って行動するしかないのだけれども。

—— だけど、そうなってしまう以前に、そういうことを、双方向じゃなくて、3方向ですよ。住民と行政と、専門家の情報をもらって、そういう話し合いができていないと、

—— まあ、決まりができていても、うまく機能しないのではないかとということですね。その手前が大事ということ。

—— そうです。で、何も分かっていないで動いたら、今回の原発みたいに、風下のほうに逃げてしまったとか。動かさないほうがよかったかもしれない人をあちこち動かしてしまったとか。

—— ええと、話し合いのテーマとして、皆で自治体にどうしてほしいかを考えるのか、それとも、自分たちが避難するときどういう情報がほしいのか、どういう避難をするのかを考えるのか。

—— そう。だから、「何を話し合うのか」を聞いているのですよ。

—— 個人もそうなのだけど、最終的には地域住民が、1軒1軒のおうちや人ではなくて、一斉に避難しなければならないような事態が起こったときのことなので。うーん、だから、行政がどう情報提供するかみたいな一方的な話ではなくて。どういう情報提供をしたら、

(木村) しかも、そのときにどんな避難行動をすればいいか、ではなくて、避難行動をするために、今から話し合っておきましょう、ですよ？

—— そうです。

(木村) なので、「情報提供」とか「避難行動」よりは、「緊急時に私たちはどう行動したらいいのか」くらいのタイトルにしておいたほうが、今の話ができると思います。

—— 「考えてみよう 緊急時の行動を」。

(木村) では、そんな感じでいいですか。

—— 「緊急時に私たちはどう行動したらいいのか？」。

(木村) はい、それにしましょう。

—— テーマ案にはそれぞれ「内容」をつけるのですか？

(木村) つけます。理由は入れませんが、どんなことをやりますというのをつけます。

それで、次回 10 分で紹介するときは、私が代表して読めばいいですか？ それとも、提案者が読みますか？

—— いやいや。

—— 1 人にまとめたほうがいいのでは。

(木村) では私が一括で話すことにします。

そうすると、あとは確認ですが、F6-10 を見てもらえますか。第 5 回のご案内ですが、フォーラム最終回なので、研究関係者および資金提供関係者が視察に来る可能性があるということについて、了解を取っておこうと思います。まだこちらから連絡はしていないのですけれども、そういうことになると思います。

あと、最終回はまた懇親会をやろうと思いますが、よろしいですか？

—— はい。

—— 同じ会場で？

(木村) はい。16 時半に終わるので、16 時 45 分くらいから始めて、2 時間弱ということで、18 時半くらいかなと。会費 2000 円でいいですね？ 最初と同じスペックで。

で、第 5 回の反省会はどうしましょうか？ 去年と同じで、プリントに書いて提出する形にしましょうか。懇親会の中に、15 分くらい書いてもらって、それで反省会の代わりになると。

で、今日は F6-4 で流れを確認する時間は取れていないですけれども、大きな変更はありません。イントロダクションがあって、グループワーク 1 をやる。これは 2 グループで進めさせてもらいます。

—— サブファシリテーターは3人ですか？

(木村) 3人いたほうがいいですか？

—— いれば余裕がありますね。

(木村) 2人は記録で、1人は支援するということにしましょう。

—— グループワーク2は？

(木村) グループワーク2は、いつもの質疑応答です。グループワーク1の後、全体共有をして、休憩と質問作りの時間があって、グループワーク2でその質問の中から重要だと思うものを2問選んで、話し合うといういつものスタイルです。

次回テーマが16時からで、振り返りが16時10分からということで、終了は16時半になります。

ということで、最後は駆け足でしたけれども、よろしいでしょうか。

4. その他

(木村) それでは、今週の土曜日もしろしくお願いいたします。今日はこれで終わりにしたいと思います。

あと、もし本当に台風が直撃になったら、その日の朝に連絡します。

以上